
一瞬でいい、そばにいて

透明な石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一瞬でいい、そばにいて

【Nコード】

N5319R

【作者名】

透明な石

【あらすじ】

サクラ大戦の大神×マリアの恋愛もの。結婚の約束をしたものの記憶喪失となった大神に逃げ出してしまったマリア。その後、久々に会う2人と2人を取り囲む花組のメンバーのさまざまな思いを表現しています。

一日目（前書き）

サクラ大戦の大神とマリアの恋愛小説です。
受け付けない方は読まれないようにお願いします。

一日目

貴方に会えない日をどのくらい過ごしたのでしょうか？

貴方が私の事を、全てを覚えていないことは承知しています。

それでも、私情のための勝手を・・・許して下さい。

貴方を慕っております。

昔から とても深く

何かを望んでいるわけでも、期待をしているわけでもないのです。

忘れてください。でもどうか、

私は貴方に対する思いこれからもこの胸にしまい続けることをお許しください。

もう、お会いすることは無いでしょう。

それでも、願ってしまうのです。

また会ったとき、貴方がいつものように微笑んでいることを。

きつと滑稽な思い。伝えることができるほど、私は強くない。

すでに忘れ去られたと知っていても、この気持ちを過去のものとして受け入れることもできない。

書き留めてみた気持ちを届けられるわけもなく、捨てることもできず、目立たないように引き出しの中にしまっておく。

マリアは船首に立っていた。果てしなくのびる水平線の彼方を想う。天使に導かれあの地に向かうときもこの船に乗った。あの時は、何ももっていなかった、言われるがまま体一つでこの船に乗った。今は、多くのものをもちすぎて自分では動けない。

それでも船は波を切り進む。

潮の音が・・・穏やかに広がり、
冷たい風が、体を吹き抜けていった。
体が砂になって少しずつ消えていくように感じる。
今は春、あの花が舞う。

かの地は近い
美しき土地よ
加護されし土地よ

あの人のいる土地よ・・・

「ふう、花小路伯爵まで、私をからかって、何が楽しいのかしら・
・・・」

ため息まじりに大きな門を振り返る。熱い頬を手のうちわで冷ますが、体の内側からの熱は消えなかった。最近では、知り合いに会うたびにからかわれているような気がする。その理由を考えると、思わず頬が緩んでしまう。

横浜の町を歩きながら、みんなへのお土産を思案する。ケーキ？クッキー？それとも、……。あの人も喜んでくれるかしら、周りを見渡しながら歩いていると、ショーウィンドウにバラの飾りが見えた。その脇の白い絹の伸びやかな広がりを目で追う。そのまま視線をあげていく。純白の・・・

急にカバンに入れておいたキネマトロンになる。

我に返り、急いで電源を入れる。かえでの慌てた声が、耳に響く。

「マリア！！急いで戻ってきなさい！！」

「まさか！」

その声に異常事態、また帝都に魔が現れたのかと思ったが、かえでの言葉は違った。

「大神君が！！」

一瞬でマリアの頭は真っ白になった。

周りの乗客がぞろぞろと流れるように船を下りていく。その様子を眺めながら、最後の一瞬まで躊躇する。こんなにも弱くなってしまった自分にいくらか苦笑する。船員の方がそっと私に声をかける。誤魔化すように笑みをむけ、足を向ける。

もう帰らない、帰れないと誓ったはずなのに、懐かしいこの地を愛しく感じる。

人がまばらになり、その後ろを歩くことにもなれてきた。一步、歩くことに昔に帰っていくような気がする。昔になど帰れるはずは無いのに。

ふいに前にいた人たちの足並みが崩れるのが見えた。気にもかけず、足をすすめる。

「ちよつと、すみません」

人を掻き分け、人の間を縫うように逆流する姿が見えた。その特徴的な髪型を垣間見た。自分の目を疑う。それでも、これは事実だ。

そして、目があってしまった。

「マリア!!」

変わらぬ声、そして、変わらぬ瞳。腕をぶんぶん振りながら私に微笑みかける。私の脳裏に叶わぬ願いが、希望が蘇る。私の様子がおかしいのに気付いたのか、急に不安げな顔で私の顔をのぞいてくる。

「あの・・・人違いじゃ、ないですよね」

彼の不安に、自分の行動の愚かさを知る。

「いいえ。私がマリア・タチバナです。大神中尉、わざわざお出迎えいただき、ありがとうございます」

「いや、構わないよ。君は花組のメンバーだからね。これぐらい当然のことだよ。それより荷物を」

大神がマリアのカバンをとろうと手を伸ばしてくる。赤い手袋に触れた大神の手に、思わず体を引いてしまう。

「お気持ちだけで結構です」

私の拒絶を笑顔で受け流しながら、彼はじゃあ、帝劇に帰ろうと腕を広げてみせた。彼にとっては、初めて会う私も仲間なのだろう。

「マリア・・・って、ごめん。勝手に呼び捨てにして。みんながマリア、マリアって言うからつい俺もくせになってしまった」

「そうですか」

昔のようにマリアと呼べとはいえなかった。すでに上官でもないから、心の中で勝手に言い訳。理由をつくりあげて過去を思い起こさせるのを、やめさせたかっただけだ。人の良い彼は、私にずっと花組の子達の近況を話し続けてくれている。

「マリアアー！！！」

騒がしい港の騒音にも負けないほどの大声に、思わず私も駆け出してしまった。

「カンナ！！」

相変わらずの薄着で髪を大きく揺らしながらまっすぐ駆けて来る親友の顔に、緊張が一気に解き放たれる。互いの距離が近づきスピードを落とす私に対して、カンナはそのままのスピードで飛びついてくる。

よく鍛えられた体は相変わらずで、手加減もなく（本当はしているのかもしれないけど）腕に力を込められ、息ができないほどだ。

「苦しいわよ」

それは嘘ではないが、声も顔も浮かれてしまっていてはどうしようもない。カンナはより一層体を摺り寄せてきた。

「ああ、マリア！会いたかった！！」

「私もよ、カンナ」

その言葉に安心したのか、カンナはゆっくりと体の力を抜いた。そして互いの顔を見つめあった。まるで恋人のようなね。心の中でつぶやいて、笑ってしまう。

太陽のように、全てを慈しみ、愛する。彼女にいくら救われたかわからない。

カンナが私の髪をなでた瞬間、その瞳が悲しげに揺れる。その理由も知っている。カンナはそのまま私から視線をはずし、ふてくされたような声で大神に話しかける。

「隊長、勝手にいなくなったからびっくりしたじゃないか」

「カンナがそっちじゃないって言うのに、ずんずん行くからだよ」

「そりゃあ、まあ、そうだけど・・・」

結局マリアを先に見つけたのは大神だ。分が悪いと感じたカンナが誤魔化すように、マリアに向き直る。

「それより、早く帰ろうぜ！！アイリスたちがパーティーの準備を・・・」

「カンナ！！」

大神が慌てて、カンナの口を塞ぐ。もぐもぐと何かを言っている親友と困った笑顔をマリアに向ける大神。私は・・・何も知らない顔をする。

急いで帝劇に戻った私を出迎えたのはかえでだ。帝劇もいつもと変わらないはずなのに、どこか冷たく寒々しい感じがした。

「隊長は！！」

息も切れ、ただ感情ばかりが先を行く私には、自分がどんな声を出しているか分からなかった。かえでの青白い顔が、余計に不安を掻き立てる。

「落ち着いて聞きなさい」

そう言ってかえでは私の肩を抑えた。そんな前置きはいい、私は早く知りたかった。

「命に別状は無いわ」

「そ、そうですか・・・良かった」

緊張が開放されて、一気に涙腺が緩む。体が崩れ落ちそうになっているのが感じられた。そんな私をみて、かえでの表情が暗く深ま

った。今となつては、それでもきちんと最後まで伝えてくれた彼女に感謝する。

「それでね・・・」

記憶が消えてしまったみたいなの

「マリアー!!」

階段の上から、飛びついてくるアイリス。さすがに支えきれなくて、後ろに倒れそうになるのを、後ろからカンナが支えてくれた。

「危ないわよ、アイリス!!」

「マリアだぁー!!」

以前よりもずいぶん重くなり、もうすぐ抱き上げてあげられなくなるだろう。顔の距離も近づいて、可憐な目鼻立ちが良く見える。アイリスの成長が嬉しかった。

「レディはこんなことしないでしょ?」

「今日は特別。マリアが帰ってきたんだもん、今はマリアに抱っ

「こしてもらいたいの」

天真爛漫でいて真実を見る目に長けたその聡明さは変わらない。瞳の輝きに懐かしさを感じながら、そつと柔らかな髪に指を絡ませる。

そうしているうちに、他のメンバーも私の来訪に集まってきたようだ。涙を浮かべて喜んでくれる紅蘭。憎まれ口を言いながらも涙を拭う織姫。頬を緩ませ感情を表してくれるレニ。一人一人と抱き合い言葉を交わしながらも、もう一人の彼女が階段の上から戸惑いの表情を浮かべながら、私を見ていることに気付いていた。

「かえでさんに挨拶するから、少し待っていてくれない」

感動の再会に浸りたい彼女たちが手を引くのを、心残りだけでも足をすすめる。そして、できるだけ自然に視線をあげる。

「あら、さくら!」

早足で階段を駆け上がりながら、さくらの前に立つ。

「さくら、元気だったかしら？」

「マリアさん……くっ」

さくらは私にしがみつくように泣きじゃくった、きっと感情の狭間で苦しんでいたのだろう。私は、何も悪くない彼女まで苦しめているんだ。

彼女の震える背中を撫でながら、伝える。

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

ごめんなさい。

・・・・・・・・

言葉にはいけないから、ひたすら祈る。本当は謝罪すら許されないのだから。

本当は貴方に感謝しているのよ、とても深く。こんな感情をもつことすら許されない。

「・・・ごめんなさい」

彼女が顔を上げそういった。一瞬意味を考えてしまったが、笑顔を返す。

「いいのよ」

さくらをなだめ、かえでの部屋へ向かう。

何気なく振り返ると、そこには、見守るかのように静かに笑みをたたえた彼がいた。

私はただ足を速めた。

「は？」

ずいぶん間抜けな返答である。ましてや、上官に対する態度では無いだろう。

「最初から説明させて、大神君の乗っていた蒸気バスが追突事故

にあったの。大神君は近くにいた男の子をかばって、車内から放り投げられてしまった。幸い、前身に打撲とかすり傷だけですんだんだけど、頭を強く打ってしまったみたい。一時間前に目を覚ましたのだけど、何も覚えてないそうよ。お医者さまは衝撃による一時的な記憶喪失だといっていたわ。きっと」

「忘れてしまったんですか？」

かえでは、私の肩を押さえてくれていた手でそのまま腕を掴んでくれた、私はその腕にすがりついた。自分の体が震えている、どうやって自分が今立っているのかも分からない。

「忘れてしまったんですか？」

かえでは頷いた。

「自分も名前も、今までのことも、この場所も、みんなのことも……貴方のことも」

私には何も聞こえなくなっていた。

「大神君のご実家に連絡したわ。今ご家族がこちらに向かっているそうよ。しばらくご実家で生活してみたほうが、彼が記憶を取り戻すきっかけになると思って……」

かえでの部屋は相変わらず上品に整理され、私を優しく受け入れてくれる。その主も私の姿をみると、何も言わず受け入れてくれた。かえでは、音も立てずに立ち上がり、私の脇を通りすぎ、扉の鍵を閉めた。

カチャリという音が部屋に響く、ここは閉じられた世界。足の力が抜ける、重力のまま崩れ落ちてしまった。

「すみません・・・」

われながら力の無い笑顔だと思ったが、かえでは首を振って、私の肩を支えてくれた。

「ごめんなさいね、大神君に行かせるつもりはなかったけれど」

「いいえ、かえでさんのせいではありませんし・・・」

何か気の聞いた言葉を言おうと思ったが、何も続かなかった。

「来てくれて嬉しかったわ。ある種の賭けだったから・・・」

「

そつと寄り添ってくれる重さとぬくもりがとても懐かしかった。

いつの間にか、この感触も忘れてしまっていたみたい。自然と他者に寄り添える、ここはそんな場所だった。夢を生み出す場所だから・・・そこに、私もいたのだ。

「手紙・・・読みました」

「ありがとう」

私がここに来る機会を、この地に戻るきっかけをくれたのがかえでだ。日々を淡々とこなす私にきた一通の手紙。そこには帝劇の状況が事細かに書いてあった、そして最後に、『貴方に会いたい』とかえでの言葉があった。

「悩みました・・・私はこの地を捨てたんです。もう戻れないと、思っていました」

「この地は、誰も拒みはしないわ。私たちもよ」

「ええ、感じています」

でも、その優しさが甘すぎて胸を締め付ける。

少しためらいながらも、かえでに体を預ける。かえでの手が伸び、私の頬に流れる涙を拭った。この人に流れる血のせいだろう。天使に抱かれているような気がした。

私は、貴方の記憶が失われたとき、逃げました。

その日から、貴方に会うことも無ければ、言葉を交わすこともありませんでした。

そして、貴方への想いが日に日に大きくなっている自分に気づきました。

恋愛経験の乏しい私には、抑えることも、忘れることも、どうすることもできなかった。

結局逃げ続けることで、自分を保ってきました。

しかし、そんなことをずっと続けることもできなくなりました。

貴方の元を去ることに決めました。

だから、今の私は

せめて貴方の幸せを願いたい。

きつと忘れることはできない。

貴方はたった一人の

「ええー！！ホテルに泊まるだつてえ！！」

耳元で大声を出すカンナから身を離す。

「そんな、大騒ぎしなくても」

代わりに隣にいたアイリスが身を乗り出す。

「アイリスもいや！！」

「マリアの部屋は前のままとつてある。問題ない」

アイリスの隣にいたレニまで、カンナを援護する。私がこの子達に弱い事を十分わかつていての行動だ。

「そんな事いわれても、・・・私はもう花組の人間ではないのよ？」

「そんなことかんげえねえよ、な、隊長？」

その言葉が発せられるたびに体に冷たいものが駆け巡る、私はちゃんと笑顔を作れているのだろうか。

「ああ、もちろんだよ」

そういいながら、ちらりと他のメンバーを見渡す。この子達のためにも、ここにいてほしいといっているのだ。目をみれば何が言いたいのかかるようになっていた、戦いの日々の中で身についてしまった、互いの合図。きっと彼も私の目から私の戸惑いを見て取っているのだろう。

それでも、彼は変わらずまっすぐに笑いかける。

「でも、マリアさんにも都合があるからな、カンナもあんまり無理を言っちゃ駄目だよ」

「おい、マリアさんだなんて他人行儀じゃないか、マリアはマリアだろー!？」

「そうだよ、お兄ちゃん、マリア!！」

「隊長・・・マリアだ」

悪酔いしてしまったのだろう、やけに人に絡みたがるカンナが私にべたべたとくっついていたがフラフラと歩いていくと大神の肩に腕をまわす。アイリスやレニまでカンナと一緒にあって、大神に絡んでいく。その様子に他のメンバーまでも、集まってきた。

彼の周りに花が咲く、色とりどりでどれも美しい。

何も変わらない。

あの人と何も変わらない。

いいえ、彼はあの人自身なのだ。

馬鹿な思いにとらわれ、動けなくなっているのは私だけなのだ。彼とそれを支える彼女たちは確実に時を歩んでいる。

ここにいてはいけない！！！！

急な感情の高まりに任せて、立ち上がる。

荷物を取り、早足で帝劇を後にする。何にも構っている余裕はなかった。後ろから誰かが追ってくるのが無いことだけを祈って、飛び出す。

春の夜は、寒い。

それなのに、どこか甘い香りがする。

ホテルの部屋に入ると、荷物をあけることなく、そのまま窓際に向かう。カーテンを開くと、帝都の町並みが良く見える。賢人機関に与えられたこの部屋は最上階で、星の光も、町の光も良く見える。

「・・・もう、忘れないと・・・。。。」

私は涙を止める術を知らない。

醜い嗚咽をしながら、

どんな言葉で繕っても消えない心の空洞。

意味なんて見出せるはずが無い。

忘れないと。

私だけ世界に取り残されて、

貴方の思いを頼りにさまよっている。

どんなに思っても、貴方は答えてくれない。
もう、終わらせないと。

忘れない。

私のことなど忘れた貴方なのに、
忘れたくない。

この苦しみを終わらせるために、
忘れないと。

泣き疲れて私はいつの間にか眠りについた。

きつと忘れられない

貴方に恋をしているから

今でもなお

貴方に恋をしているから

二日目

私に朝を知らせたのは、部屋に取り付けられていたキネマトロンの呼び出し音だった。目をこすり、重い体を起こして、スイッチを入れる。このホテルの従業員のようだ。

「朝早く申し訳ありません、タチバナ様」

変に知り合いじゃなくて安心した。しかし相手のほうは、疲れきった声でぐったりとしていた。

「なにかあったのかしら？」

「実は・・・・・・・・」

「全くなにを考えているのー!!」

怒声が朝の町に響く。迷惑になるのは分かっているが抑えられそうも無い。

「だってよぉ・・・」

「だってじゃないでしょう！どれだけホテルの方に迷惑かけたか考えなさいー!!」

従業員に知らされたのは、ホテルのロビーで女性がマリアを出せと

大声でわめいており、ガードマンが止めに入っただのをあつさりとき飛ばし、このままだとホテルを破壊するような勢いだから止めてほしいということだ。

「マリアが、昨日急になくなったのが悪いんだ!!」

開き直ったようで、その態度が余計に私の苛立ちをあおる。

「カンナ!!」

「ああ、わりい、わりい、反省してるってば。そうだ、腹へっていないか？朝の運動も終わったことだし、帰ろうぜ！マリアも朝飯食べてないんだろ!!」

「誰のせいよ!!」

おなかを鳴らす親友にこれ以上怒る気にもなれず、仕方なく許しあげる。上機嫌に隣を歩く、彼女が可愛くて仕方がなかった。

大盛りのご飯を目の前に置かれる。その手の主が意外な人物で目を見張った、小声で私だけに言う。

「アイリスが昨日泣いていた。マリア、すごくやせていたって、きつと無理しているからだって。かなりやせていることには、ボクも気付いていた」

「レニ・・・」

アイリスのほうを見ると、おいしそうにご飯を食べていた。アイリスのそんな思いにも気付けないなんて、私は鈍くなってしまったようだ。レニは、アイリスに背を向けて立ち、私と話していることを悟らせないようにしている。こんな気遣いをする子だったか。

「マリア、ボクはボクの友達を泣かせる人は絶対に許さない」

言葉とは裏腹に、レニの表情は優しく、涙が出そうになった。

私たちが食事を取っていると、大神がやってきて、カンナと私の間に座る。

「マリア・・・今日は用事はないのかい？」

マリアさんというべきかどうかの逡巡。もういいはずなのに、まだマリアと呼ばれることを拒否する自分がいる。

「ええ、今日はとくには・・・」

「そうか、良かった」

大神はそう言って、照れたように頭をかく。昔と同じしぐさが、くせが、今の大神に重なっていく。目をそらせなくて、胸が痛む。

「できれば、あの、みんなで花見をするつもりなんだけど、君も来ないかい？」

「花見？」

そう言つて、隣で笑っているカンナに問いかける。そんな話は聞いていない。

「かえでさんから許可下りたのか！」

「もちろん、今日の夜の部での演目をやりきることができたらつていう、条件付きだけどね」

大神は、できるだろ？と瞳で問いかける。

「よっし、がんばるぞー！」

そう言つて、カンナは目の前のどんぶりめしをかき込んだ。そんなカンナを子供のようになじらしく眺めていると、同じように穏やかな目でカンナを見つめる大神と目が合った。

貴方は確かに、私の知っている人ではないはずなのに、ありのままの貴方で、何も変わらなくて、

もう、懐かしいなんて言葉じゃ収まらない

春爛漫。

サクラの花びらがゆらゆらと風に乗っている。

先を歩くさくらと大神が微笑んでいた。

風が吹くたびに、花びらが空を舞う。

右手に柔らかなぬくもり。

「マリアー！」

私の気持ちを悟ったのだろうか、少し笑顔に悲しみが混じっていた。アイリスは人の心を知ることができる。でも、もうこの子は子供ではない。力の使い方を学んだ、人との関わり方を学んだ。

ありがとう

心の中で伝える、アイリスは少しだけ手を握り返してくれた。

すると、もう片方の手も温もりに包まれた。レニが手を握ってくれている。あれからずいぶん背も伸びて、アイリスと並ぶと愛らしい恋人同士だ。

私はどれだけ幸せなんだろう、こんなに愛すべき者たちに囲まれて・

・

「あたいも混ぜろよー！！」

「きゃっ」

カンナが後ろからしがみついていた。首に回された腕が、ちょっと苦しかった。それが心地よくて文句を言うのも忘れてしまう。

「ずるいデース、わたしもまぜてくださーい！！」

何かの遊びと思っているのだろうか、織姫がアイリスと私の間に入り込むと、私の腰にしがみついていた。

「ああ！！うちも入れてやー！！」

紅蘭までも、レニ側から私の腰にしがみつく。

「ちょっと、歩けないわよ」

確かに歩きにくいのは事実だけど、周りの人が注目しているの気付いているけど、私までも笑ってしまっている。

先を歩く二人は、何かを喋りながら遠く離れていく。
サクラの花が散る。

風が吹くたびその樹に宿る花は減っていく。

そして、空を舞い、地に落ち……………

二人は前を見据えて、進んでいく。

ああ、サクラの花が……………

一片の花びらが私をすり抜けていく

「なんや、せつかくの花見に酒があらへんの！！」

「当たり前よ。貴方たちは公演があるんだから」

「そうですね、昨日のパーティーでずいぶん飲んだじゃないですか」

「かえでさんが、甘酒もたせてくれたからこれで我慢してくれよ」

「わーい、甘酒すき！！」

お弁当を開くと、みんなも嬉しそうに頬を緩ませる。久しぶりに誰かのために作ったお弁当は、すごい速さで減っていく。両手におにぎりを握り締めた親友が隣にかつと座り込む。コップにお茶を入れてやる。

「マリアの作ったご飯が一番うまいなあ!!」

「褒めてもなにもでないわよ」

「それにしても・・・あと一週間早かったら満開だったのに」

私には色鮮やか過ぎるこの景色は、満開ではなかったようだ。

「いいのよ、すごく綺麗」

「・・・なあ、マリア」

親友の何か言いたげの目に、

「少し、散歩してくるわ。みんなの事を頼んだわよ」

ちらりと皆のほうを見ると、紅蘭お得意の皿回しを始めており、それをみんなが笑ってみている。

カンナの記事も聞かず、そのままその場を離れた。みんなの笑い声を背に、どこにいくのかも分からず、ただ足を運んだ。

「この国の桜が一番綺麗ね」

見上げると、ピンク色の花が青空に映える。

「俺もそう思うよ」

振り返ると彼が立っていた。彼もさくらが良く似合う。

「た、・・・大神中尉」

「実は、みんなに甘酒を頼まれてね。お酒を我慢させたぶん、俺にやつあたりしているみたいで・・・」

困ったふりをしているが、彼は嫌だと思っていない。少しでもみんなが喜んでくれるなら、彼は笑ってなんでもする。

けっして、身を焦がすような恋愛じゃなかった、この仲間たちともにも歩むなかでゆつくりと育てていった思い。

命の危険のなかでの互いの信頼から、いつの間にか胸の高鳴りを感じていた。この感情が何なのか、どうしていいのかすら分からない私を、彼は微笑んで受け入れた。

「さくらが好きですか」

手を離したのは私

「ああ、好きだよ」

どうか 幸せになってくださいね

「君は？」

私は・・・

「好きでした」

さくらの花びらに包まれて、彼は笑う。

お願い、感じさせないで
貴方が好きだと感じさせないで

久しぶりに自分の部屋に入る。誰かが掃除してくれていたのだろ
う、とても清潔に保たれていた。
ドサッ

カンナが私の荷物を床に下ろした、もう少し丁寧に扱ってほしいも
のだ。

「どうだ、久々の自分の部屋は？」

嬉しそうにカンナは笑う。

「ホテルで暴れたら困るからよ！」

少し睨み返ししながら答えるが、全くこたえない。これだから勝てないのだ。

「そういえば、かえでさんから聞いたわ。花組の副隊長になったんですってね。てつきりさくらかレニがなると思ってたんだけど、貴方は面倒くさがって嫌がると思っていたんだけど」

カンナの置いた荷物を片付けながら、問う。カンナが何も言わないので心配になって顔を上げる。

「カンナ？」

カンナの思いつめた顔でじっと私を見つめる。私はカンナがなにを思っているのか分からなかった。

「マリアの場所はなにがあっても、あたいが守るから」

「!」

「副隊長もこの部屋も、絶対に誰にも譲らないから」

「カンナ・・・」

立ち上がり、カンナの顔をのぞく、カンナが顔をそらした。この人はなんて温かいのだろう。

カンナの肩にもたれてみると、何故だか笑みが浮かぶ。

彼の腕にコート袖を通す、こんな事をしている自分を少し恥ずかしいと思いつつも、彼の大きな背中を見ている。

「大神さん!!」

思わずその背中に抱き付いてしまった。彼は驚いたようで、首だけこちらに向けて、心配そうに私を見る。

「心配なくていいよ。陸軍本部に呼ばただけだし、すぐ戻る」

そんなことを心配しているわけじゃないのに、彼は一生懸命説明する。その説明を聞けるのも、この部屋にノックしないでは入れられるのも、こうやって彼のコートを羽織らせられるのも……私だけなのに。

腕に力を込めて、存在を確かめる。そのまま彼の背中に顔をうずめて彼から見えないようにする。

「マリアさんと……お話されていましたよね」

ああ、そうか……彼女がなにを不安に感じているのか。純粹でそのままの感情をぶつけてくる彼女がかわいらしく感じる。

「ああ、サクラの話をしていたんだよ」

「え」

急に顔を上げる彼女。思わず吹き出してしまいそうになる。

「樹のほうだけどね」

好きでした

花の香りがどこからかする。
金糸がゆれる、綺麗な人だ。
緑の瞳が俺を見る。

やわらかくて優しい、誰もが見とれるほど美しい
それなのに、とても悲しそうな笑顔
それも儚く消えて
彼女の声だけが耳に残る。

「大神さん？」

「ああ、そろそろ出るよ」

腰に回された腕を離して、仕度にかかる。背中にさくらの視線を感じたが、振り返ることができなかった。一言言って、安心させてあげればいいのだ。それだけで上手くいくはずなのに。
さくらは手を伸ばした。

一瞬、指先にコートが触れた。

「おいしいわね、日本酒」

自分が酔っている事には気付いていた。なにをしても楽しい。隣のカンナはやけにいぶかしげな目で私を見る。

「まあ、米田さんが置いていったやつだからな」

「あら、そうなの。うふふふ、だから楽しいのかしら」

「大丈夫か？フラフラしているぞ？」

上機嫌に酒をあおる私に、カンナはため息混じりでみていた。そして、時を見計らって聞いた。

「……隊長のこと、忘れられないのか」

「ん？」

「まだ、すきなのか」

カンナの声だけがやけに沈んでいておかしかった。私はこんなに楽しいのに。

「何よ、何もしないから安心なさい」

それでも、カンナは笑ってくれない。

「何も変わらないから驚いたわ、私たちと過ごした日々を忘れたはずなのに、あの人はあの人で……貴方たちと笑いあっている姿が、あの頃と一緒に、何も変わらない」

「きつと、私はここにいられないわ」

「もう戻らない。私は彼を捨てて逃げ出したのよ、今さら何も望んでいないわ。それに、さくらが不安げに私を見るのも、かわいそうだし」

「それでいいのかよ・・・そんなに簡単な思いじゃないんだろ？」

「良いも悪いもないわよ。ただ、幸せでいてくれればそれでいい」

自分でもなにを言っているのか分からなかった。カンナと一緒にいることが嬉しくて、楽しくて、仕方ないだけだ。どうしたらカンナに伝わるのかしら。

「カンナ、笑って。私は貴方も大好きよ」

カンナの肩にすがりつく、いつの間に私はこんなに甘えたになったのかしら。

「あの人は幸せになれるわ。いいえ、なるのよ。だから、今度はカンナの幸せを祈ることにするわ」

「マリア・・・・・・・・おまえ自身は何も望まないのか」

いくら擦り寄っても、カンナは笑ってくれない。より一層瞳を曇らせるだけだ。

「私自身？なにそれ？」

カナナが構ってくれないので、酒に構ってもらうことにする。口の中に日本酒の甘さが広がる。この感覚は、この土地でしか味わえない。

「そうね、」

隣で机に突っ伏しながら、すうすうと寝息を立てている親友は、いい夢でも見ているのだろうか、幸せそうに笑っている。

イツシュンデイイノ ソバニイタイ

「なんで、あたいが泣いているんだよ」

三日目

目が覚める。重い体の感覚はいつもと同じだ。

目をこする、いつもの感覚が無い。朝目覚めると最初にする癖。いつこんな癖が付いたのか分からない。濡れた感触も、乾いたかけらも手に触れない。

ふと隣を見ると、ベッドの半分以上を占領している親友がいた。その頬にしずくがずっと流れる。

零れ落ちてしまう前に指で拭った。

「貴方が代わりに泣いてくれたのね」

ああ、こんなに大切な人まで、私は……

私が占領していた毛布をかけて、そっとベッドから抜け出す。

部屋から出るとき、毛布を蹴り上げる音がした。

コートを脱ぎ、ベッドに座り一息つくと思わずため息が出てしまった。それを陸軍からの緊急な呼び出しのせいにして、横になろうとしたとき、コンコンとノックの音が聞こえた。この音は、

「どうぞー」

「すまねえ、隊長。昨日渡そうと思っていたんだけどよ、手間取っちゃってさあ」

ぱりぱりと頭をかきながら入ってくるカンナの目がはれている。

「カンナ……どうかしたのかい？」

普段なら、もう少し様子を見てから聞いたかもしれないが、今の俺にはそんな余裕はなかった。カンナの顔が歪む、悲しみ？怒り？

「あたいアンタが好きだったんだよ。すごくすごく好きだった。でも諦めたんだ。・・・だって気付いちまったんだよ。」

「カンナ？何言って・・・」

カンナとは会ったときから、ずっと気心のあう友達として付き合ってきた。カンナもそう思っていたはずだ。それどころか微塵も恋愛感情をカンナが見せたことはない。

「マリアと一緒にいるあんたに惚れちまったんだって」

なぜ、忘れたのか！！そう言っているように見えた。
涙を流しながらカンナは訴える。

あたいが側にいると、マリアは笑ってくれる。
だって あたいが代わりに泣いているからさ。

でも一人になるときとあいつは涙を流しているんだ。

あたいは笑ってほしい、マリアに。

もう一度、もう一度、

一瞬でいい、笑ってほしい

俺には、分からない

一瞬なんて、夢い願い

人の流れに飲まれるように足をすすめる、町はにぎわっている。
ふとそこに花が見える。目の錯覚かもしれないが、そこだけがとても明るく見えた。

「織姫!!」

織姫は私の声に振り向いた。大きな紙袋とアイスクリームをもっていた。人ごみの中でも、長身の私は目立つ。すぐに見つかり、

「マツリアさん!!」

人の流れに真っ向に逆らい、私の元にやってくる。笑顔が眩しい。

「珍しいわね、こんな朝からお出かけなんて」

「昨日、レニに買い物頼まれていたです。忘れていたら、たたきおこされましたー」

レニにたたき起こされる様子がありありと思い起こされて、思わず笑ってしまった。

「マリアさんはどこいくんですか？」

「私は、仕事よ。ちょっと懐かしい人に会いに行くの」

二人で並んでゆっくりと歩く。織姫はおいしそうにアイスクリームをなめている。

「イタリアのサン・カルロ劇場、気付かないと思ったですか？」

「・・・さすがね」

「どんなに隠れたってマリアさんは目立ちまーす。見ていて恥ずかしかったでーす」

カツラにサングラス・・・私のしていた格好を言っているのだろう。そういわれると急に恥ずかしくなった。

「マリアさんが今みたいにこの人ごみの中から私を見つけたように、私たちはマリアさんがどこにいたってすぐ分かりまーす」

織姫は、手に持っているアイスクリームをぺろりとなめる。

「あの時、私はマリアさんのために歌いました」

赤い貴族・・・その彼女が演じたのは、意外にも人魚姫。泡となつて消える、恋。

「一瞬でもいい、伝わってほしかったのでーす」

振り返る。まるで情熱を表したかのように赤いドレスがふわりと舞う。その軌道に思わず見とれてしまう。

「拍手、嬉しかったでーす」

一瞬 唇に冷たい物が触れる。

唇をなめると、ひどく甘かった。

豪華な屋敷で通された待合室から案内されたのは、花の香りのする部屋だった。何か覚えがあるのに、分からない。そんな香りだった。そこに優雅に座っている彼女と目が合う。

給仕に示された椅子に座る。何か言おうと思ったが、ためらわれた。

「下がちなさい」

「しかし・・・」

私よりも早く彼女が給仕や周りにいた側近たちに言い切る。見知らぬ女と二人つきりにさせていいものか、彼らが戸惑うが、すでに彼女は何も言うことはないと美しい切れ長の瞳を細める。

よそ者が何もいなくなったことを確認すると、私は懐から一通の手紙を差し出す。その手紙には賢人機関の紋章が描かれている。

「こちらが、例の書状です」

「話は聞いておりますわ。神崎としても、力になりたいと思います」

彼女はそのまま私から手紙を受け取ると、開封することもなく同じように懐にしまった。

「かならず議会で承認させてみせますわ」

互いに頷くと、そこで話は終わった。

同時に笑みを浮かべる、こんな瞬間につながっていることを感じる。

「久しぶりね、すみれ」

「ええ、ずいぶんと変わりましたわね。マリアさん」

貴方こそ、と言う言葉を飲み込んだ。そんな安い言葉はすみれには似合わない。細く長い指が紅茶のカップを持ち上げる。

「元気そうで良かったわ。といっても、アメリカでも貴方の名声は届くから何も知らなかったわけじゃないんだけど」

「それは、逆もしかり、ですわ」

美しい笑みで返される、気高く、そして強き優しさを兼ね備えた彼女はそれ以上何も言わない。

「それに、うるさい方が人の家に入りこんできては、貴方の事を聞きたがるから、わたくしとしても、貴方のことにずいぶん詳しくなっていましたわ」

騒いでいる彼女を思い出して、くすくすと笑っていると、すみれも呆れながらも笑っている。この二人のつながりもまだ切れていない。

「ごめんなさいね。手紙を書くようにするわ。・・・貴方にも」

音信不通では心配をかけてしまうわね。思いは一方通行じゃないか

ら。

すみれも、目をそらしながらも分からないように頷いた。

「もう、出るんですの？」

静かに、落ち葉が地に落ちるような穏やかさで、問う。
私も頷く。

美しい柳眉が少しだけ歪むのを私は見てしまった。

彼女は気付いている、これが最後だと。

それでも彼女は私にしっかりと向き直り、声高らかにいう。

「何も心配しておりませんわ。貴方も、花組の仲間ですから……！」

繋いだ手を離すのが惜しかった。

それでも離す、それぞれの道を進むため

「アイリス、マリアを見ていないかい？」

サロンでくつろいでいたアイリスに声をかける。答えたのは、隣で
アイリスにお茶を入れていたレニだ。

「マリアなら朝早くに出かけた」

「どこへ？」

「そこまでは聞いていない」

そうか、ありがとうといってその場を離れようとする、アイリスが心配げな顔で俺を見る。

「マリア・・・どうかしたの？」

「いや、ちょっと気になることがあって。もし、マリアにあつたら帝劇からあまり出歩かないように言ってくれるかい？」

口が滑ったと思ったときには遅かった。二人の顔から笑みが完全に消える。

「マリア、危険なことにかかわっているの？」

「そういうわけじゃないよ、ちょっとね」

「ちょっとじゃ分らない、隊長」

「マツリアさんなら、朝会いましたよ！！」

背後から明るい声が響く。織姫が、目を丸くして俺を見ている。三人からいきなり凝視されて驚いているのだろう。

「どこに行くっていつていたんだい！！」

俺たちの気迫にただ事じゃないと感じたのだろう。

「仕事で、懐かしい人に会いに行くっていました」

「仕事、懐かしい人・・・」

「心当たりは？」

全員が首を振る。話が途切れるのを感じたレニが飛び出す。

「カンナなら分かるかも」

「あたいは知らない。あたいにもあいつは何もいってない」

騒ぎを聞きつけたのだろう、いつの間にかカンナが立っていた。

「あー！うち、わかるかもー！」

その隣に立っていた紅蘭が大きな声を上げた。

「あ、大神さんー！」

支配人室の扉から飛び出したとき、さくらが大神に声をかける。

「さくらくん、みんなには帝劇から出るなといっておいでくれ」

「え？どうかしたんですか」

大神にはさくらに説明している余裕はない。

「何も無いといいんだけど。とにかく、マリアが戻ってきたなら、彼女から連絡があったならすぐに俺のキネマトロンに連絡してー！」

さくらは、一番聞きたくない人物の名が出てきたことにつろたえる。しかし、大神はさくらに振り返ることなく、背をむける。一人唇を噛む。

「ずるい……………」

マリアは早足で道を駆け抜ける。自分がどこに向かっているのか、今ここがどこなのかすらも分からなかった。人がいないほう、そして、できるだけ荒廃した地域。後ろにいた男が距離を詰めてくる。それを感じた瞬間、マリアは駆け出した。

コンクリートの爆ぜる音がした。目の前の路地に身を隠す。相手は複数だ。状況的には圧倒的に不利。身を隠していた路地のほうから、足音が聞こえてくる。

「ちっ」

舌打ちしたところで状況は良くなるはずは無い。相手の弾がなくなるのを見計らって違う道へ体を移し、駆け出す。追ってくる男の足音が近づく前にあいていた窓の中に自らをしのばせる。

息を殺し、男が過ぎ去るのを待つ。こんなとき、昔なら……命を奪えばよかった、何も考えずに。

彼への想いはこんな形でしがらみになる

彼と誓い合ったわけじゃない。誓いなんて綺麗な言葉じゃない。

ただ、共に生きていくのなら、もう誰の命も奪わない。
一緒にいるわけでもないのに、共に生きているわけでもないのに
エンフィールドを握り締め、私は逃げる。

男が近づいてくるの感じて、男の足を狙う。一瞬だけ胸の中に冷たいものがつたう。それに気付かないように、後ろで銃口を向ける男の銃を弾き飛ばす。男が腕を押さえる。後ろから物音がした。すぐに反応して、銃を向ける。思ったよりも遠く離れたところにいた男もつと近くに感じたはずだ、おかしいと思いながらもその男の銃を狙う。

バリッ

真上のガラスが飛び散る。この感覚は、死の気配。
深くなる香り。さあ、どうする？

上から男が飛び降りてきた、接近戦にもっていかれると辛い。
さらに男たちが近づいてくる、囲まれる――！！

私はそれでも、殺せない

それでも、・・・・・・

ドカッ

鈍い音が響き、腕を引かれる。

「昨日、陸軍本部から呼び出されて、賢人機関からの使者が秘密裏に日本で活動しているって情報が入った」

大神は額に浮かぶ汗を拭いながら、周囲に注意をしている。
私は、荒れた息を抑え、全神経を集中させる。

「1、2、・・・6、7、全員で8名です」

「紅蘭から聞いた、君がなにをしようとしているのか」

大神の目は鋭く、どこまでもまっすぐだ。戦闘時のぴりぴりとした緊張感が心地よい。

「私がおとりになります。その間に逃げてください、中尉」

大神の眉間にしわが寄る。

「なにを言っているんだ!!」

「貴方には花組を守る義務があります」

「君だって」

「私はもう花組の人間ではありません」

大神の気が荒くなった。まるで獣に追いつめられた感覚。

「・・・・・・本気で言っているのか？」

「あの子達を悲しませるようなことは、しないでください」

大神はため息をつく。

「君一人では無理だ・・・君は人を殺せないんだろう？資料で読んだよ」

彼が知っているのは、資料の上での私だけ。

「……その資料に、私は上官に銃を向ける女だと書いてありましたか」

笑う。できるだけ嫌な女に見えるように。大神が啞然と私の顔を見ている。ゆつくりとエンフィールドを構える。彼の顔に恐怖が映る。それでいい。

身を翻し、その場を去る。名残があつたのか、振り向いてしまう。

「私、こう見えても強いんですよ」

物陰に身を潜め、男の手にある銃を狙う、これを撃てば戦闘開始だ。あの人を守るために、私は強くなる。

5人目！！倒れていく男を見もせず足すすめる。左後方から二人、振り返らなくても分かる、今銃を構えている。足に力を込めて飛び込む。隅にあつたゴミ箱にぶつかる。痛い上に、くさい。こんなことに構っている暇はない。

視線に映った男の影にむかつて一発。右腕に当たる、よろける男を後ろの男が支える。その男の左足に狙いを定める。

あと一人！！足音をさぐるが、感じられない。どこかに潜んだか？大神はすでに逃げ切っただろうか、彼が逃げ切れればそれでいいのだ。

そう思うと、気が抜ける。銃をおろし、ゆつくりと足をすすめる。彼と戦場を共にするのは避けたい。あの高揚感、私を殺すから。

ジャリツと砂を踏む音がした、銃口が私に向いている。

私が構えるよりも早く男は引き金を引く。

左胸上部。こんなことまで分かる自分の目をのろった。心臓には当たらないが、間違いなく致命傷。

目だけがさえて、体が動かない。

視界の端から伸びる腕も、その人の瞳も、全て良く見えた。

大神と一緒に倒れこむ、

「隊長！！」

ゆがめられた表情、思わず触れてしまった腕から血が流れている。

ああ、分かっていたのに。

彼なら絶対に私を見捨てていきはしないと分かっていたのに

「隊長は死なせない！！」

男の銃が火を噴く

大神の前で両手を広げて、立ちはだかる。

この人だけは死なせない。

あの子達のためにも

昔の私のためにも

でも

私も死ねない

私にはすべきことがあるの

守るべき仲間がいるの

死ねない

この人の前では、絶対に！！

放たれた弾丸が凍りつき、ぽとりと地面に落ちた。そして、男の握っていた銃が男の手ごと凍りつく。フラフラとしながらも、マリアはエンフィールドを男に向ける。その必要もなく、男はこの現象を理解できずに逃げていった。マリアが霊力保持者ということを知らされていなかったのだろう。

それをみおくと、自分のハンカチを取り出し、大神の傷口に当てた。

「隊長・・・」

「ありがとう」

痛みに顔は歪んでいたが、大神の笑顔を見た瞬間、マリアの中で何かが吹き上がる。

まずい！！

そう思っただけで急に大神から離れたが、バランスを崩したため壁にぶつかる。マリアの触れた壁が一気に凍りついた。

「マリア！！」

大神は目を見張ってマリアの様子を見ていたが、すぐにマリアに手を伸ばす。それをマリアは拒否する。

「来ないで！！」

マリアの足元からバキバキと音を立てながら氷柱が現れる。

息も絶え絶えに、フラフラとしながら、潤んだ瞳で大神を見る。

「貴方を凍りつかせたくないの・・・傷つけたくない」

翡翠の色をしたその瞳は、ただ優しく、大神は衝動的にマリアを抱きしめていた。

いやいやとマリアは首を振る。それを手で押さえつける。

「落ち着くんだ、マリア!!」

それでも、マリアは最後まで抵抗する。だがその力もだんだん弱くなってくる。

カクリと力を失った体が、ひどく冷たくて、力を込めると壊れてしまいそうだった。

「マリア!!」

マリアを抱えて帝劇に帰ってきた大神に、誰もが絶句した。大神の着ていた褐色のコートが白く凍り付いていたからだ。

いち早く我に返ったかえだが、

「早く、医療ポットへ!!」

大神から奪うようにマリアを抱えあげたカンナがかけていく。それに、かえだが付いていく。後のメンバーは呆然とそれを見ていた。

「・・・マリアはんが、霊力の暴走?」

紅蘭が信じられないと言いたげにつぶやいた。科学者である彼女は、戦闘時におけるマリアの精神力の安定さをデータとしてみている。

「・・・アメリカでは、週に数回あったみたいですわ。目覚めると、部屋中を凍りつかせてしまったり、急に体温が急激に下がって倒れたりと・・・」

「すみれ君・・・」

かえでから連絡が入ったのだろう、帰りの遅いマリアと大神を心配して帝劇に帰ってきてくれたのだ。自分の仕事を置いてきてまで。

「わたくし共がきちんとお送りしていればこんなことには、・・・申し訳ありません」

頭を下げるすみれに、大神は力なく首を振る。

「君のせいじゃない」

俺が守れなかったんだ

うなだれる大神に、織姫が突然大きな声を上げる。

「中尉さんのその顔、久しぶりに見たです」

「へ？」

急な言葉にその場にいた全員が哑然とする。思いつきり場違いな言葉に責めた目で見ているものもある。

「ホラ、マリアさんが怪我して、ぶっ倒れた時のことでーす!!」

「ヤフキエルの時のこと？」

レニの助け舟に織姫はうんうんと頷く。DS社の一件の後、帝劇に遅れて帰ってきたマリアは包帯に身を包まれていた、大丈夫だとみんなに笑みを向けていたが、大神の姿を見た瞬間、気が抜けたのかそのまま倒れてしまった。

「そやな、そんな顔してたで、大神はん」

「・・・・・・思い出せない」

彼女を守れなかった

守ると誓った、彼女を

きつと彼女は笑って、

俺のせいでは無いと言う

自分がしたかったからだという

俺が守りたいのはそんな君だということも知っていて、
側にいよう、ずっと

彼女の側に

大神は頭を抱えながら自室へと戻っていった。

机の引き出しを開ける。しばらく空けることのなかった引き出し。
俺がこの生活を楽しむことを覚えたからだろう。中には古くなった
一冊の手帳がある。それは、書いていたときよりも、読み返すこと
のほづが多かった証。もう何度読み返したかわからない。過去では、
一日の出来事を記したただの日記に過ぎなかったものが、現在では、

大神一郎と呼ばれる男をつくりあげた根本である。

「大神さん！」

明るい声に振り返ると、さくらが救急箱を持って立っていた。

「怪我の治療をしましょう」

さくらの表情が固まる、目線の先には俺の手になっている手帳がある。過去の俺よりも、現在の俺を生きているのは過去の俺ではなく、今の俺だそう言つて、手を握ってくれたさくらが今にも泣き出してしまいそう。何もないと、手帳を引き出しにしまいこむ。

「お願いしてもいいかい？」

「・・・はい！！」

嬉しそうに、微笑むさくらを見下ろす。

大神一郎という人間は一人しかいないはずなのに、それは俺自身であるはずなのに、どこかに別の

別の強い思いをもった人間が

確かに、この胸の中にある

「私、こう見えても強いんですよ」

気丈にそう言って笑う彼女に、どうして信じるといって笑い返せなかったのだろう。

「マリアはまた、ひとりどこか遠くにいつちまうんだな」

ずっと一緒に暮らしていけるとは思っていなかった。事実、すみれはこの帝劇をさり、自らの力で、道を切り開き進んでいる。

「マリアは、幸せなのかなあ・・・」

「ボクは、マリアに笑っていてほしい」

「マリアはんは、いつだってうちらのことばかり優先させてしまうさかい」

いつだって、自分たちの事を思っていてくれた

厳しく叱るのも、必要以上にきつちりとしているのも
自分たちを導くためだった

「それでも、信じるしかないのですわ。マリアさんを」

私が、貴方たちを信じて、この場所を去ったように
皆が、すみれを信じて、見送ったように

マリアは眠る

一瞬

はかない希望に すがらせて

絶対に叶わないから それを知っているから
せめて一瞬

夢を見せて

叶わないと知っているから

四日目

冷たい手に触れる。そのままゆっくりと握る、自分のぬくもりが伝わっていき、彼女の手も暖かくなっていく。そのぬくもりがだんだん熱へと変わって行く。

俺はこの手を知っている。

そっとその白い手に口付ける。彼女はそれでも目を覚まさない。自分のしている事に気付き、慌てて彼女から手を離す。この感情をどうしていいのかもわからず、眠る彼女を置いて部屋から出る。

大神は自室に戻った。

「

大神さん・・・マリアさんのところに行っていたんですか？」

さくらがベッドの上で座って待っていた。大神は突然のことで戸惑ってしまふ。その戸惑いが伝わってしまったのだろうか、さくらに悲しみが浮き出る。

「ああ、まだ目覚めないみたいだ。でも、数値も良くなっているし、命には別状はないよ。しばらく安静にしていればすぐに良くなる」

さくらがそんなことは聞いてないと、大神の懐にすがりつく。

「マリアさんのことが気になるんですか？」

「それは・・・彼女も花組の隊員だからだよ」

我ながら、いい訳じみていた。

「これ、・・・昨日、これを見ていましたよね」

さくらが手にしているのは、引き出しにしまったはずの手帳。

「さくらくん・・・返してくれないか」

さくらは手帳を胸に押し付けて、首を振る。

「大神さんは、大神さんなんです。こんなものにとられないでください」

「それは俺にとって大切なものなんだ」

「違う！！大神さんにとって大切なのは、こんなものじゃない！！ちゃんと現実を見て！！貴方が大神一郎でしょう？」

さくらは、手帳を窓から投げ捨てる。そのまま、さくらは大神にしがみつくとように抱きついた。

「私を見てください！！貴方の側にいるのは私！！」

さくらは、背伸びをして大神の唇に触れる。

さくらの頬に涙がつた。それを拭って抱きしめた。

「今日は千秋楽だ。予約も埋め尽くされている。気合を入れて頑張

つてくれよ!!」

大神の声に皆が大きくなづいた。その表情に不安は無い。

「じゃあ、みんな、頼んだよ!」

「隊長もモギリ、頑張れよ!!」

王子役に扮したカンナが大神の肩を叩く、その衝撃にふらつきながらも大神は頷いた。
それを見ていたかえでが、その場から抜け出し、眠り続けているマリアの部屋に向かう。

「マリア!!」

マリアはベッドから立ち上がり、シャツのボタンを留めているところだった。しかし、まだ体の調子が悪いようで、まともに指が動かないようだ。

「何しているの、寝てなさい!!」

「かえでさん・・・」

「顔色が真っ青よ、ちょっと横になって」

かえでが腕を引くとマリアはあっさりとベッドに戻った。でもそれは、自分ひとりで立っていることもままならないからだった。

「かえでさん、お願いです」

「駄目よ。こんな体で動けるわけないでしょう?」

マリアはかえでの腕を掴んだ。弱々しいながらも精一杯の抵抗。かえでがマリアの顔をのぞく。泣きそうに瞳を潤ませたマリアが、子供のようにかえでを見つめる。

「マリア・・・・・・・・」

「これが、最後なんです・・・」

出番を終えたレニがカンナの顔を見る。その瞳は、真剣なものだった。

「気付いたか」

レニも頷く。

「何でだろう、嬉しいというよりも、苦しい。この感情が何なのかわからない・・・」

「あたいもさ」

舞台袖から、客席を覗く。たった一人が浮き出ているように見える。その人はただまっすぐに自分たちの舞台を見ている。

みせてやるよ

誰よりも輝いてみせよう

お前が 光を見失わないように

帰る場所があるということ

ずっと変わらない 永遠の想いだ

消えるな 負けるな

あたいたちがいる

伝わってくれ

想い、想われ人はつながっていく

忘れるな

一瞬じゃない想いを

大きな拍手が巻き起こった

アンコールに応え、全ての演目を終えた花組のメンバーは言葉を交わすことなく、そのままの姿で走り出していた。
マリアの部屋から大神が出てきた。

「マリアは――！」

一気に詰め寄る花組の少女たちに、大神は抑えるように人差し指を口に当てた。はっとして、口を押さえる少女たちだが、その勢いは消えなかった。

「無理して動いたから、熱が出てしまったけれど、大丈夫」

その言葉に一同がそろって安堵のため息をつく。

「伝言だよ。『素晴らしかった、ありがとう』って」

「ありがとう？」

大神は頷いた。

「君たちに感謝しているそうだよ」

「マリアに会えないの？」

アイリスが泣きそうな顔で大神の手を握る。他の少女も同じ表情で大神を見る。

「休ませてあげよう。すぐに元気になる」

「今、会わないといけない気がするんだ」

大神は首を振る。マリアの状態はそんなによくない。アイリスは大神と繋いでいないほうの手で、マリアの部屋の扉をそっと触れる。

「分かる？」

「・・・うん。マリア、喜んでいる。笑っている」

アイリスの頬に涙がつつと流れる。きっと本人は気付いていないだろう。

これで、
心はここにおいていけるって
ずっと 側にいられるって

アイリスの手の震えが伝わってくる。他のメンバーも音も立てず、
涙を流す。

俺だけが、この想いを共有できない。

引き出しを開けても、そこには何もない。

「心はここにおいていける
ずっとそばにいられる」

形のないものを彼女は置いていこうとしている。その心を少女たちが
が受け取ろうとしている。

何故そんなにあやふやなものにすぎるんだ？

彼女がすぐれるものはないのか？

違う!!

・・・・・・俺だっただ。

彼女があんなに悲しげな瞳をしているのも

一人で旅立ってしまうのも

慈しむように、花組の子達を見守っているのも

俺が彼女を一人にってしまったからだ。

でも、俺に何ができる。

「大神さん・・・どうかされたんですか」

いつの間にか頭を抱え込んでいたようだ。さくらがいつからここにいたのかも分からない。そつとさくらが隣に座る。

「朝はすみません。取り乱してしまって」

「・・・いや、いいんだ」

「よかった。嫌われてしまったかと思いました」

なんて応えたらいいのか分からずに、下を向いていると、服を引っ張られる。

「抱いてくださいますか？」

「へ？」

さくらはそのまま首に腕を回して、ぎゅっと抱きついてきた。

「抱いてください、お願いします」

「さくらくん、おちついて」

さくらがここまで求めてきたことは無い。これは不安の表れなのだ。さくらの肩を抱き、引き離そうとするが、さくらが腕の力を弱めることは無い。

「知りたいんです。大神さんの気持ちが・・・大神さんとの確かなつ

なかりがほしいんです」

確かなつながり・・・彼女はそれを求めなかったのだろうか。こんなときまで浮かぶのは、白い肌をした麗人だ。それを振り切るように、目を閉じる。

「すまない、さくらくん。そんな気分じゃないんだ」

そういった瞬間、さくらの顔がこわばる。

「マリアさんですか？」

さくらの傷ついた顔から目をそらすことができなかった。何も応えない俺に、さくらはさらに顔をゆがめる。

「私じゃいけませんか？」

「紅蘭じゃない、こんなところでなにをしているの？」

かえでがテラスを覗くと、呆然と空を見上げている紅蘭が立っていた。自分の羽織っていたカーディガンをそっと紅蘭の肩にかけてやる。

力ない笑顔で礼を言った紅蘭は、静かに続けた。

「かえではんはマリアはんが日本に来た理由、知ったんですか？」

「いいえ。あの子にそろそろ帰ってきてほしいと手紙を出したのは事実だけど」

私の答えに紅蘭がうつむく。

「うちが新たに提案した高性能靈力転換装置を利用した飛行艇の設計。うちも考えながら実現は無理やと思っていたんや。だって、帝都、巴里、紐育、それぞれの都市に靈力保持者が集められている。新たに探さなあかん。都市発展に役立つとはいえ、膨大な費用もかかる。他にも理由がようさんある」

紅蘭が顔を上げて、私の顔を見つめる。

「マリアはんが、いろんな人に頭下げて頼んでくれてたんや!!」

紅蘭の瞳に涙が浮かぶ。それを拭ってやることもできない。言葉を発することのできない私を置いて、紅蘭の声は訴える。

「このことだって人づてに聞いたことや。マリアはんにも、何も頼んどらんのに。マリアはんは、ただ、うちが考案したってだけで信頼してくれる」

興奮してきた紅蘭は私の腕を掴んで、揺さぶる。

「紅蘭・・・」

「賢人機関がそれを了承するかわりにマリアはんにだした条件が、高レベル靈能力者の探索および保護や」

「・・・賢人機関にとって靈力保持者はとても役立つものだわ。のどが出るほどほしい人材。それを、同じ靈力をもち、実戦経験も豊富でありながら、実際に光武に搭乗したことのあるマリアはまさにうってつけだったのね」

マリアの性格だ。これを断るはずがない。彼女自身もあの人に救われ、この地にやってきたのだ。

「うちのせいでマリアさんの場所を奪ってしもたかと思ってたんやけど、」

紅蘭は、私の腕から手を離し、涙をぼろぼろ流しながらまっすぐ私の瞳を見て笑う。

「マリアはん昔と変わらんきれーな笑顔でいうんや、こっ、うちの胸に手を当てて、」

私の胸に手を当てる。温かい思いが伝わる。マリアがどんな表情で、どんな思いで触れていたのか、手に取るように分かった。

「私の帰る場所がここ、だから私はどこまでもいけるわ、って」

どこまでも、という言葉にある人の姿が思い浮かんだ。もう、手の届かない人。紅蘭の手が急に離れた、手のぬくもりが消える。温かいはずの余韻なのに、どこか悲しい。

「でもな、マリアはんにとって一番大切な人の心の中には、マリアはんの帰る場所はないんや。大神はんがなんにも悪うないのはわかっとなる、それでも、それでも、マリアはんが」

紅蘭がなにを言おうとしているのか、分かっていた。自分も同じ思いなのだ。誰もが同じ思いなのだ。

「マリアが自分で決めたことよ」

何も報われない

「嫌な、月だわ」

赤く煌々と静かな夜を蹂躪するかのように輝く月
あの人と同じように、あの子も届かなくなりそうで
そんな事を口にできるはずもなかったのに
それが皆に伝わっていく

「レニ、一緒に眠っていい？」

「・・・久しぶりだね」

「怖いの」

「大丈夫、一緒にいるよ」

自分がなにをしでかすか分からなかった。ただ物音すらしない部屋の扉を開ける。気配にさとい彼女は辛そうではあるが、すぐに体を持ち上げた。

「さくら・・・」

カーテンの締め切られた薄暗い部屋。それでも、彼女の白い肌は浮き出るように美しかった。彼が瞳を奪われるのも分かるほどに。それが余計に憎しみを増し、彼女の襟首を掴みかかった。彼女は抵抗するでもなくただ私を見る。

「みんなの同情を引いて、私が悪者みたいに、マリアさんから大神さんを奪い取ったみたいに！！」

彼女の美しい緑色の瞳が見開かれる。

「マリアさんは大神さんを捨てたんです、一番側にいなきやいけなかったのはマリアさんなのに、逃げたんです。分かるでしょう。大神さんは大神さんなんです。あの時もいまだって、あの人の強さも優しさも変わらないんです」

つかんだ服をぐいぐいと引っ張る、彼女は私にされるままに体を揺らす。この人はこんなに弱い人だったか。彼の隣で、私たちを支えた彼女はもっと強かった。

「今さら取り戻そうとしたって遅いんです。そんなの虫が良すぎます。彼はもう新しい道を進もうとしているんです。邪魔しないで！！」

ずいぶんとやせ細り、白い肌は血の気をうせている、それでも、彼女は笑顔を保ち続けていた。何も無い、何も心配要らない。そういうように、笑っていた。

それでも、ふとした瞬間に彼を見つめていた。そしてそらすのだ。彼を想っているから

「昔の大神さんがマリアさんを愛していたことは知っています。それでも、私は大神さんを譲らない！！私は絶対に大神さんを渡しません！！」

懇願に似たこの叫び声が 苦しかった

「月が・・・赤い月が消えたとき、ここを離れるわ」

赤い月はある人に見られているように感じるから。私は黒い翼を持たないから。

さくらの顔に驚きが映る。カーテンが閉まっており、私は動ける状態でも無い。さくら自身も空なんて見ていなかったのだろう。

「分かるわ、みなくても。赤い月が出ている。それが消えるまで、・・・許して頂戴」

朝を待つまでもない。きっと雲が隠してくれる。

私は、どこか遠くにいきます。

何の因果か、私に命を与えた人と同じ目的を持って、もう戻ることはないから 最初からそのつもりだったけれど笑ってくださって 嬉しかった

ただ、嬉しかった 貴方の笑顔が
さよならさえいえないけれど、永遠の別れです

かすかに残るこの

「一瞬」なんて脆い夢をもったままで行かせてください

どうか 幸せになって
私の愛しい仲間たち

私の愛した人

曙光

無音の世界

自分の靴音がやけに大きく聞こえる。まともに動かない自分の体に鞭を打ちながら、一心に足をすすめる。

もう振り返ってはいけない、そう思いながら、仲間たちの部屋を眺める。知らず知らずのうちに微笑がこぼれ出てくるのは、彼女たちが強く輝いているから。

思い出ばかりが蘇るが、どれも全て愛しく、悲しかった。なんて幸せ者なんだろうか。この数日で、どれだけ自分の事を思ってくれているか身に染みて分かった。

それでも、私は行くのだ。

床を踏みしめながら廊下をわたり、階段に出る。玄関が見える。よるける体を手すりが支えてくれた。その冷たくて滑らかな感触をそつと指先で確かめながら、また足をすすめる。

だが、その足が止まってしまった。

闇からあらわれたその人影から、目を離せない。

暴れだしてしまいそうな、感情を抑え、笑みをつくる。

「もう、行かないといけないんです」

彼は何も答えない。

「みんなにさよならを言ってもらえませんか？」

ただ、まっすぐに輝く瞳が私を射抜く。

ここでひいてはいけない。私は弱くなっではいけないのだから。震える膝を無理やり動かして、1つ、2つと階段を下りていく。

「君から返してもらわないといけないものがある」

彼の言葉に足が止まる。返さないといけないもの？なにを言っているのか分からず、彼を見る。

彼も私をじっと見つめる。目をそらそうにも、震えてばかりで体は言うことを聞いてくれなかった。沈黙と無音が重なり、世界がなくなりそうだった。それなのに、心が壊れそうに音を立てる。

「最初は、君が何故いなくなったのか、ずっと考えていた」

大神のゆっくりで静かな声が響く。

「君の事は、・・・君との事はいろんな人から聞いていたから、どうして君がいなくなってしまったのか分からなかった。俺への思いはその程度だったんだと、それで終わらせようとした」

「でも、みんなは・・・特にカンナはね。マリアはそんなヤツじゃないって言い張るんだ。うん、それは俺も君にあったときにすぐに分かったよ」

少し微笑んだ彼に揺らいでしまう。お願い、お願いだからこれ以上・・・

「俺がどんなふうに君を見ていたのかも分かったよ」

そついうと、彼は一步階段を上る。私は、それに体を震わせる。こ

のまま駆け下り、彼を通り過ぎて外に出ればいい。後ろに逃げて、彼から逃れればいい。

「君も知っているかもしれないけれど、俺はずっと日記をつけているんだ。帝劇に来た日からずっと欠かさず書かれていた。その中には思いつきが、さくらくん、すみれくん、アイリス、紅蘭、カンナ、いなくなってしまったあやめさん、そして新たに加わった織姫、レニ、かえでさん、さらに巴里のみんな、エリカくん、グリシーヌ、コクリコ、ロベリア、花火くん・・・そのみんなと過ごした日々が細かく書かれていた。でも、一人だけ名が書かれていなかったんだ」

今の私には、彼の言いたいことも、過去の彼の意図も分からなかった。そんな思考回路はなかった、ただ、一步一步確実に近づいてくる彼を見ているしかできなかった。

「・・・彼女は笑ってくれない。彼女が微笑んでいた。彼女に叱られてしまった・・・」

大神は一度そこで立ち止まった、そして一度私の目を見て微笑み、また一歩足をすすめる。わかるだろう？といったげに。

「ずっとその彼女とのが書いてあった。いや、彼女について書かれていない日はなかったよ。それに、恥ずかしい話だけど、君の写真が中に挟まっていたから」

いつの間にか私の目の前に立っていた彼が言う。

「俺の指輪を返してほしい」

彼の言葉に全身を打ち付けられるような衝撃が走る。

「な、何の、ことですか」

言葉が上手くつながらない。

「君との将来を誓った指輪だ」

「し、知りません、そんなこと!!」

思わず叫んでしまった私に、彼は仕方が無いと諦めるようにため息を付く。

「君はとても優秀で有能だけれども、詰めが甘い」

彼は手に持っていた手帳を掲げるようにして私に見せた。

「私は!!」

「君が俺との結婚に不安を抱いていたことは、俺は気付いていた。それでも俺は君と一緒になりたかったんだ!!」

「・・・隊長」

それが目の前にいる彼か、あのときの彼を呼んでいるのか分からなかった。

「君の不安・・・俺との生活、花組のこと。いや、君のことだ。君の血と過去が俺の将来に影響する事を危惧したのだろう?そして、

記憶を失った俺の負担になりたくなかった。何の記憶もない俺にとって婚約者という存在がどれほどの重みになるか考えた」

彼にあのときの事を知る術など限られているのに、彼は私の心の隙を付くように続ける。

「でも、君は涙を流して喜んでくれたんだ。私なんかで良いんですかって」

「このまま君の心を縛り付けるつもりは無い。だから、指輪を返してくれ」

ここだけは守らなくてはならない最後の砦

「・・・かえでさんに捨ててくれるように頼んだんです。ここを出るときに。私には捨てることも、もって行くこともできませんでしたから・・・ずいぶん昔の話です。ですから、もう」

ないと続けようとしたが、彼はポケットの中からそっと取り出す。それがなにであるかは一瞬でわかった。

「そんな・・・!」

「かえでさんから返してもらった。ずっと、捨てないでとっておいてくれたんだ。でも、これは君の指輪だ。俺が君に送った指輪だ。俺が返してほしいのは、これじゃない」

私はこの状況を受け入れられずにただ呆然と立ち尽くした。つと

冷たいものが手に触れて、ようやく自分が涙を流していることに気付いた。

「知りません、私は、何も知りません!!」

「マリア!」

彼は辛そうに私を見る。

「君は詰めが甘いつていったらどう? 本当は指輪だけでなくこの手帳をも持っていくべきだった」

首を振って否定する。まるで子供が駄々をこねるように。

「俺は君への指輪と一緒にかならず自分のものも用意したはずだ! !君と共に生きていく証として!!」

「いや、・・・いやです。お願い、許して隊長」

「誰もが俺に思い出せといった、君だけが俺に思い出せとわない、今だってだ!! 一番側にいた君は何も言わないで俺の前から去った。一番辛いのも、一番俺の記憶が戻るのを望んでいる君が!!」

醜く泣きじゃくる私に、彼は声を荒げる。

「返すんだ、マリア!!」

その声には体は反応する。絶対不可避な命令。彼の声で命じられれば、どんな命令でも聞いてしまう。それでも、涙は止まらなかった。

私は、ゆつくりと首にかけられたロケットをはずす。そのロケットの隣には寄り添うように指輪があった。その指輪を鎖からはずし、彼の手に差し出す。無様に震え続ける手から離れていった。

『一瞬』

叶わぬ夢も消えていった

ロケットをポケットにしまいこみ、やけに軽くなった胸と罪の感覚。私はどうすることもできなくて彼を見る。

彼は私から受け取った指輪を物珍しそうに眺めると、あっさりと彼の左手にはめた。

「良かった。指は太くなってないみたいだね」

満足そうに私に笑いかける。彼の行動の意味が分からず、呆然としている私。

「いや・・・その・・・」

何か言いたげな彼だが、照れがあるようで、頭をかきながら伺うようにして私を見る。

「もし、君が良かったらなんだけど・・・」

この指輪のこれからについて話さないかい？

彼は持っていた指輪を、そっと掲げる。

空が明るくなっていた。

窓から日が入ってくる。

彼の手に握られているものが、

かすかに輝いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5319r/>

一瞬でいい、そばにいて

2011年5月7日17時20分発行